

学 位 論 文 要 旨

氏 名 秀真一郎

題 目 保育者による受容を促す統合的な効力感向上プログラムの実践開発

保育者は日々の保育の中で、子どものより豊かな発達を促そうと、目の前の子どもや保護者と向き合い、受け止めながら保育を行う。保育者が子どもや保護者を捉え受け止めるという行為、すなわち保育者による受容は、保育理念として極めて重視されてきたが、必ずしも十分な知見が蓄積され共有がなされてきたとは言い難い。そこで本研究では、保育現場における保育者による受容の捉え方の実際を、量的及び質的に分析することにより、実証的な知見を得るとともに、保育者による受容に関わる効力感（以下、保育者受容効力感）を測定する尺度の開発を行った。そして、この尺度を活用し、保育者が自らの受容について理解し、自律的に保育の変容を図ることを支援する、統合的な効力感向上プログラム（以下、支援プログラム）の開発、実施、及びその効果と関連要因の検証を行った。その際、保育者受容効力感及びその関連変数に着目し、保育者に対する効果的な支援方法の提示を目指した。

本研究全体は、4章構成である。第1章では先ず、主題である「保育者による受容」について、研究の範囲と位置付けを明確化した。次に、国内外の「受容」「保育の質」「保育者効力感」に関わる先行研究を概観した上で、研究の目的と内容構成を示し、定義付けを行い、用語を整理した。また、本研究全体に関わる倫理的配慮について記した。さらに、本研究の全体像、対象と分析方法を示した。そして、保育者自身が自律的な変容を図ることができる支援プログラムを開発するという、本研究の全体構成を説明した。

第2章は、保育者による受容の力量形成ならびに自律的な保育への変容に向けた基礎的な知見と、実証的な研究により各節が構成される。第1節では、保育者による受容の捉え方の特徴を分析する背景について先行研究を整理し、保育者による受容を共有する必要性について論じた。さらに、保育者による受容の力量形成と自律的な保育への変容に向け、保育者受容効力感の可能性について論じた。第2節では、保育現場における保育者による受容の捉え方に関するテキストデータを収集し、主にテキストマイニングにより量的に分析することで、保育者による受容の抽出語と共起関係、受容の捉え方と保育経験年数の関係や共通点等について明示した。第3節では、保育者による受容の捉え方について、SCAT (Steps for Coding and Theorization) により質的分析を行った。具体的内容を理論的内容へ進めることで、保育者による受容の捉え方が実証され、総合的に示された。これらにより、保育者による受容に焦点化した保育の変容を促す、支援の端緒が得られた。

第3章は、保育者による受容の捉え方を活かし、保育者受容効力感を高める支援プログラムの開発とその効果の検証を試みた。第1節では、保育者受容効力感を捉える新たな尺度（以下、保育者受容効力感尺度とする）を開発し、その構造を明示した。分析の結果、4因子20項目が抽出され、明確な多次元構造が確認された。また、十分な信頼性、妥当性を有することも確認された。第3節では、現職保育者に対して、第2節で開発した自律的な保育への変容を促すことを目指した支援プログラムを実施し、検討を加えた。具体的には、支援プログラムを実施した実験群と統制群に対して、保育者受容効力感等を測定し、支援プログラムの効果を検証した。その結果、実験群の保育者受容効力感が、有意に上昇したことが明らかとなった。また、支援プログラムの確かな持続効果が確認された。他の関連変数の中にも同様の効果が認められ、その有効性が裏付けられた。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し考察を加えるとともに、研究の到達点、今後の課題、及び今後の展望を提示した。第1節では、保育者による受容の特徴と変容過程に関して、得られた知見を整理し考察を加えた。具体的には、保育者による受容の高まりに関する考察を加え、モデル図を提示した。第2節では、保育者による受容と保育者効力感との関係を捉えた上で、支援プログラムを開発、実施した結果について改めて検証し、考察した。支援プログラムでの保育者受容効力感の高まりと保育者の意識変容から、支援プログラムの流れと保育者の意識変容についてモデル図を提示した。第3節では、今後の課題と展望として、保育者受容効力感尺度と支援プログラム開発・実施上の課題を示した。そして、保育者による受容からみる展望と可能性について論じた。